

創刊昭和55年5月5日
第396号
 【通巻397号】

発行所 まんいちほち
418こちら情報部
 〒418-0063
 富士宮市若の宮町140(きうちんさつ内)
 TEL 0544 24-1515
 E-mail: printkiuchi@space.ocn.ne.jp

印刷所
株式会社 きうちんさつ

次号は 6月5日の発行です。
 発行数 15,500部

こちら情報部
 yon.ichi.hachi.

爽やかな風が心地良く、まばゆいばかりに光り輝く新緑。心身共にリフレッシュしてみませんか。



勝又 肇 (淀平町)

くらしの中の言葉から 19

ヒバリ

新緑が芽を吹き、風薫る季節となりました。先日、市の広報を見ていたら、市の鳥がヒバリ(雲雀)であると知りまし。たしかに、市内には「ひばりが丘」という地名もあり、まだまだ自然も豊かに残っていますので、富士宮には、市の鳥になるほど多くのヒバリが棲んでい

るのだなあと思えました。松尾芭蕉の句に「永き日も 轉(さえずり)たらぬ ひばり哉(かな)」とあるように、大きな声で鳴くヒバリの声には方言や、うまい・へたがあるのだとか。そのため、昔はヒバリの声を競う会がよく行われ、出場させる鳥には美しい鳴き声を

聞かせて調教したのだそうです。昔は日本全国にいたヒバリも、今では数が少なくなり、東京などの都会では絶滅危惧種に指定されています。ヒバリの声を聞いて春の空を見上げて、空の上の方を飛んでいて、なかなかその姿を見つけないことが

きないのは私だけかも知れませんが、特に今年は、姿はおろか、まだ鳴き声すら聞けていません。もしかしたら、都市化が進む富士宮が、ヒバリの住めないような土地になりつつあるのではないかと、少し心配しています。

萬歳

何を書こうかな

春の電車事情

三月初旬の電車の風景。高校生が卒業し、あ、あの子は三年生だったのか」と、この時期、初めて分かる。電車内は空き間風が吹くから

四月の第二週の電車内。私はいつもの時間に駅に着く。そして、少し並んで乗車する。「エッ、私のいつもの席が空いていない」緊張が心の中を走る。キョロキョロ、空席を探し始める。あるにはあるのだが、プレッシャーのような感覚が襲いかかってくる。どこでもいやと、ヤケ気味に座る。しかし、腰が落ち着かない。身体が固くなるのを感じる。周囲を見渡すと、新しい制服の新生たちがグループになり、語っている。その喧騒に、私は寝たフリをするしかなかった。完全に主人公は高校生だ。明日は時間を変更して、乗ろうと決心していた。

望月 勝

三月中旬の光景。学校は春休み、がら空きになっている。のんびり座って、富士山を見ながらの通勤、田舎の電車って、感じになる。

四月に入ってから車内。最初の週は、新入社員らしい人の服装が目立つようになる。フレッシュユマンの登場だ。こちら「よし、やってやるぞ」という気になるから不思議なものだ。

マンスリーエッセイ 234

携帯電話

先日、久しぶりに東京の地下鉄に乗り驚いた。と言うのもほとんどの乗客が能面のよう無表情で、携帯の画面だけを見て、素早く手を動かしている場面に遭遇したからである。私は何か急に自分が異次元に入ってしまった

様な気がした。無論、私も携帯を持っていて、その利便性を十分理解しているが、それでもなお、この地下鉄の風景は異常であると思った。本を読んでいる乗客など皆無であった。日本の将来はこれで大丈夫なのだろうか。と老婆心ながら心配になってしまった。

行く春

今年のさくらの花時は、平年よりも十日ぐらいはやく、またたくまに散ってしまったが、一方で、菜の花の明るさが目にしみる今日この頃。ふと、小学唱歌の「おぼろ月夜」(高野辰之作詞/岡野貞一作曲)を口ずさむ。

菜の花島に入日薄れ 見わたす山の端霞ふかし
 春風そよふく空を見れば 夕月かかりて匂い淡し
 菜の花の咲く光景は、春の風物詩として馴染深く、これを詠んだ名歌や秀句はきわめて多い。

「菜の花や月は東に日は西に」(与謝蕉村)
 【鑑賞】 一面を菜の花で塗りつぶしたような景で、日輪は西の空に傾いているが、反対の東の空にはもう大きな月が登っている——これだけの大景を十七音にまとめるというのは、よほどの手腕を持たねば出来ぬことだが、蕉村の画家としての構想力が立派に働いているのを認めなければなるまい。(俳人 水原秋櫻子)

ところで、放送作家の萩原津年武氏は、著書の中で——
 日が暮れて月が出てまた日が昇る。
 「日」+「月」+「日」=「明日」

なんとも無理のない自然体の配列で出来上がった漢字といえる。しかも、文字の裏側に秘められている意味は読んでも解るように「明るい日」なのである、——明るい日は、嬉しい事や楽しい事が一杯詰った希望に満ちた日とも解釈出来るわけで、そんな日ならやって来るのが待ちどろしい。「酒の席で披露したくなる日本語」、英知出版

また氏は、「こうして次から次に良い方に解釈出来るのが『明日』という文字の持つ本質なのだ」と述べている。一日、「今日の日に明日が内包されている」ことからして、日ごと、あるがままに明るく歩みたい。

茅葺きの里頼もしき職かな

KEN III

静岡県立朝霧野外活動センター

「プラネタリウム一般開放 ~春の星空と神話~」
家族で春の夜空を楽しもう!

日時: 19日

1部 13:15~受付 13:30~14:30上映

2部 15:00~受付 15:15~16:15上映

申込方法: お電話にてご予約ください。

詳細は後日センターHPにて発表いたします。

TEL: 0544-52-0321

HP: <http://asagiri.camping.or.jp/index.html>

伝言板

角田猛夫

